

---

# 流れる雲とともに

哉井 樹砂子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流れる雲とともに

### 【Zコード】

Z2085A

### 【作者名】

哉井 樹砂子

### 【あらすじ】

女子大生の陽子は、偶然立ち寄ったインドカレー専門店で、殺人事件に遭遇。そこにいた無精髭男と事件の核心にせまるが・・・

真つ直ぐに長い国道の脇に、陽子は車体のドアにもたれながら、眉をひそめていた。

「やつてしまつた・・・こんな所で、パンクとは」

もう口が落ち終わる七時頃。

黄昏時の雲は、綺麗に通つていく。

陽子は、同時にこの状況の虚しさと悔しさを感じていた。

「ああ、っ！－みのさんのミリオネアが観れない」

陽子は車にしがみつき、ガクッと頭を垂れた。

もちろん、ビデオ予約はしていない。

陽子のポリシーは、リアルタイムこそがゴールデンの神髄だ！である。

陽子のオレンジ色のノースリーブから、白く細い腕が伸びている。

「観たい・・・今日は、叶姉妹が出るのにい－！」

しかし、レッカー車が来るまでは動けない。陽子はお腹を押さえて、溜め息をつく。

「お腹もすいたし・・・あ、そういえば」

右斜め後ろを肩越しに振り返ると、インドカレー専門店『あらびあ』と言う看板が掲げてある。

どうせ、レッカー車が来るまで一時間はある。

「インドカレーを食べながらのみのさんもおつなもんよね・・・」

陽子は短い髪をかきあげ、携帯と車のキー、そして財布とともにカレー専門店へ足を踏み入れた。

カラソッ

店のベルが店内に響く。

お客様四人とインド人の顔付きをしたコックがこちらを振り返る。

陽子は颯爽とドア側から一番目のボックス席に座った。

もちろん、カウンターの端にあるテレビが見えるようだ。

左の窓から見える夕日は、いつになく赤い。

「じ注文は？」

コックは陽子を見ずにお冷やを差し出した。非常に流暢な日本語に、

陽子は少し驚いた。

「チキンカレーとライスで。後、テレビのチャンネルを//コオネアにかえてちょうどいい」

と陽子が答えると、コックは何も言わずに立ち去った。  
お冷やのグラスをぐいっと傾け飲み干すと、テレビにはゲストを睨むみのさんのドアップが映った。

陽子はかじりつくりょうにテレビを見つめる。

しばらくして、丁度宣伝になり、オーダーした品が運ばれてきた。  
陽子はカレーを口にしながら、初めて客の顔を観察した。

陽子とは反対の壁側のボックスにいる二十代後半から三十代前半のカップル。

一重まぶたに青いアイシャドウをのせた女性とあまり冴えない輪郭の四角ばったポロというメーカー・シャツを着ている男性の組み合わせだ。

女性の方は、始終煙草を吸つていて、何回もカラーリングしたと思われる髪もプラスされ、いかにも不健康そうだ。

男性の小さな目はオドオドしており、女性のつくれ悪態にうん、うんと頷くだけだ。優柔不断男の典型だ。

次に目につくのが、カウンターに座り、コーヒーを飲んでいる五十近い男。

新聞を読んでおり、ダボダボのズボンに、白いタンクトップ。

肌は焼けており、肩の筋肉は、土方工事をやっているだらつと思わせる。

最後に、三十代後半の男。

どこかの浮浪者と言つても通用しそうなナリをしている。  
この暑いのに、ベージュのコートを着込んでいる。

しかも、半袖・・・いや、七分袖？ 左右の長さが違うのである。

黒いスラックスに、またもやベージュのチューリップハット。極めつけは、なんとも言えない無精髪。

陽子はこのなんともいえない状況に苦笑した。

ある意味、特徴のある人間が集まっている。もちろん、陽子も例外ではない。

陽子は都内の女子大生で、軽快な振る舞いとその涼しげな美貌で、いつも周りに人が集まる。

一種のカリスマ性をかね備えた女性だ。

だが本人は一人が好きで、ドライブや旅行、カラオケまで一人で行つたりする。

本当に仲の良い友人も一握りで、その友人さえも彼女の行動には首を傾げるのだ。

陽子がカレーをたいらげ、コーヒーを注文して飲んでいると、みのさんがテレビの中で手をふつていていた所だった。

カレーが意外と美味しく、夢中になつて食べていたおかげで、テレビをみれなかつた。

陽子はカレーの皿を睨み、この美味しさを呪つた。  
アンバランスなカツプルの男性がトイレに席を立つ。

右脇に黒の手持ちバックを抱えている。

やはり、この女に荷物を任せられるという信頼はおけないのだろう。

テレビは天気予報へと変わつていた。

明日は曇りだそうだ。

最近、暑い日が続いていたのだから、たまには曇つてもらわなければ、日に焼けまくつた陽子の雷が落ちるだろう。

男性が帰つてきてから、煙草の火を消して、女性がトイレに入つていいく。

洗面所の鏡を見れば、煙草の吸いすぎで、半分口紅がとれかけていることに気付くだろうと陽子は思つた。

そろそろレッカー車がきてても良い頃だ。窓の外を見るが、やつてくれる気配はない。

携帯を取りだし、レッカー車について問い合わせの電話をかける。

陽子の目の端では、女がきちんとした化粧で出てくるのと同時に、土方工事の男性がトイレに入つていった。

あの後に、トイレに行こうかしらと考えながら、呼び出し音を聞く。男性が出て、ただいま向かっていますが、渋滞にはまつたみたいだと告げられた。

陽子は覚悟を決め、コーヒーのおかわりを追加する。

時計は、午後八時三分を示していた。

トイレに向かおうと腰をあげると、コーヒーがやつてきた。

陽子は、コーヒーの匂いに刺激され、飲んでからトイレに行こうと、腰をあおした。

コックがトイレのドアに手をかけ、ゆっくりと入つた。

陽子がミルクと砂糖一本を混ぜ合わせ、口をつけた。香ばしい匂いが鼻をつく。

ガダンッ

何か落ちたような音とともに、水洗の水が勢いよく流れる音がした。

「あ、ああっ・・・・・！」

悲鳴だ。

唸るような低い声と共に、店内の空気がはりつめた。

陽子は、コーヒーカップを叩き付けるように置いて、立ち上がつた。が、一番最初にトイレのノブに手をかけたのは、浮浪者じみたあの無精髭男だつた。陽子も、男の後に続いた。

最初の扉を開くと、洗面所があつた。そこには、何もない。そして、だれもいない。

よく辺りを見回すと、無精髭は男女共同トイレのドアを強くひいた。中には、眼孔を開き、口からよだれを垂らして倒れているコックの姿があつた。

蓋の閉まつた洋式便座に上体をのせ、右手は何かを掴むかのよう曲げられている。

無精髭男は、倒れているコックの左手首に触れ、首を横に振つた。

「死んでる。すぐに、警察に通報してくれ」

無精髭男の視線は陽子でなく、いつの間にかきていたカップルと土方工事の男に注がれていた。

煙草好き女は死体をみて、声にならない悲鳴をあげ、顔を真っ青している。

土方工事の男は眉をひそめ、舌打ちをした。

「なんだ、こりや・・・・・」

「見て解らんのか、死体だよ」

と、無精髭男がのんびりと答えた。

「それより、警察呼んでくれ。そこのアンタでいい」指を差された煙草好き女は茫然としていたが、我に返り、携帯をバツクから取り出した。

陽子は死体の傍にしゃがみ、胸の前で腕を組んだ。

「自然死、自殺、もしくは・・・・・」

「殺人・・・・・と言いたいのかな」

その言葉の主に視線をやり、陽子は問いかけた。

「・・・・・アンタはどう思つ?」

問われた相手は、無精髭をさすりながら、陽子を見つめた。目つきが、ギター侍に似ている、と陽子は思つたが、その目には何か不思議な輝きがあつた。

惹き付けられる何かを秘めた眼差しに、陽子はたじろいだ。しかし、直感した。

こいつは、犯人じゃない。

もしかしたら、犯人を探し当てるができる人間かもしれない、と。

「さあな。ただ、言えることは人が一人死んだつてことだな」

陽子は頬を膨らまして、そいつを睨んだ。

「アンタは気に入らないけど、その応対は気に入つたわ。名前は?」無精髭男はチュー・リップハットを脱ぎ、陽子に演技がかつたおじきをした。

「梨ノ木 通なじのきどあると申します。以後お見知りおきを、可愛いお嬢さん」

陽子は冗談のよつな名前に呆れて、天井を見上げた。

「・・・・先が思い遣られる気がするわ」

See you next

「警察きたみたいよ。・・・梨ノ木さん？」

と、陽子は梨ノ木を見て首を傾げた。

「トイレの床に寝そべるのが趣味なの？」

無精髭男もとい、梨ノ木はガバッと起き上がり、低く唸つた。彼の動作は、まるで工サを盗られると勘違いした犬のようだ。まあ、違和感がないのはどうかと思つが・・・。

「お嬢さん、ここを見て」「らん」

梨ノ木の指差すタイルの一角に、じつと陽子は目を凝らすと、「あつ！…これ・・・針じゃない。ってことは、まさか毒殺？」と、小声で呟く。

傍には、まだ容疑者である三人がいるので、トーンを下げたのだ。梨ノ木がにっこり笑つた瞬間、ぞろぞろと警察が現れた。陽子と梨ノ木は素早くその場を離れ、警察が入れるように横に避けた。

検死官らしき人が入つていった後に、陽子たちの前にスーツに白い手袋をした男が立ち止まつた。

五十過ぎで、いかにも頑固ですつて主張していそうな眉に、薄くなつた白髪の頭部。だが、嫌な印象は与えない。

「・・・梨ノ木、またお前か」

梨ノ木はにんまりと笑い、その刑事（であるかは不明だが）の肩を「ごついた。

「あ・・・逆岐刑事じゃないですかあ！いつぶりですかね」<sup>さかき</sup>

「三週間振りだな・・・よく、事件に巻き込まれる男だな、全く端からみても、呆れた表情を隠せずに唸る姿は、瘦せたブルドックのようだ。

「まあ、お前さんがいると事件もすぐ片付くがな」

逆岐は梨ノ木の傍を離れ、現場である狭いトイレへと向かつた。陽

子は、右肘で梨ノ木をつつく。

「今のおじさん、何なのよ？」

「ん？ どうからみても、警察関係者じゃないか」

梨ノ木のはぐらかし技には、陽子も歯がたたない。

何か言い返そうとしたが、容疑者全員は店の椅子に座るよつ告げられた。

逆岐は、座ろうとした梨ノ木に目で来いと合図した。

「殺害されたのは、藤森充刃祢 <sup>ふじもりみつぱね</sup> 四十三歳。祖父母のどちらかが日本人で、国籍は日本だそうだ」

逆岐刑事は台所の隅で小さな声で話す。

梨ノ木は、うむと相槌を打つた。もちろん、陽子は強引にくつづいてきた。

「でな、お前さんは知ってるだろ？ が、仏さん、裏ルートと繋がつてたよ。なんでも、うまくブツを流すことで有名だったらしい」

「なんの裏ルートよ？」

逆岐は露骨に嫌そうな顔をし、陽子を眺めた。

「どうでもいいがよ、梨ノ木。この娘っこは容疑者の一人じゃないのか」

その言葉にニヤッと笑うと、陽子を前につきだした。

「いつたいわねっ！ なにす・・・」

「このお嬢さん、携帯と財布、車の鍵しか持ってきてないんだよ。まあ、検査してみないと分からんが」

梨ノ木は続ける。

「それに、彼女はトイレに入っていない。容疑者から、うまく外れる」

陽子は、梨ノ木がそこにいた人間の行動を記憶していることに驚いた。

逆岐が胡散臭そうに陽子をみていたが、手帳を捲り読みあげた。

「奥道陽子・・・都内のF大二年生。父は病死、母子家庭。二年前から一人暮らしを始める。現在は、花屋『カリッジ』にアルバイト。

トをしてくる」

・・・・警察なんだから、調べることなんて朝飯前だとは分かつているものの、良い気分はしない。「親父さんがいたから、簡単に調べられたよ」

陽子は逆岐を睨んだ。

それを見て、逆岐はどこ吹く風と言つた様子で手帳を閉じた。

「まあ、俺は下つ端だからな。上の人のことなんぞ、知らねえが」「父と私はもう関係ありませんから」

陽子は不機嫌そうに会釈をして、容疑者の集まるテーブルへと向かつた。

梨ノ木は逆岐の肩をつついて、

「何なんですか、このやりとりは。逆岐さん、このお嬢さんとは初対面でしょ?」

と、聞いた。

逆岐は小声で、梨ノ木に耳打ちした。

「あの嬢ちゃんはな、警視庁の本部長さんの一人娘なんだよ。今は、離婚したらしくから一緒に暮らしてはいないだろうが、あの嬢ちゃんは物凄い洞察力で、本部長の浮氣を暴いたらしいからな。」

おっと、これは禁句だったと言いながら、逆岐は後を続けた。

「嬢ちゃんには、よく目を光させておいてくれ。何かのキーポイントになるかもしれん」

梨ノ木はふむと言い、テーブルに向かつた逆岐の後ろ姿にボソッと呟いた。

「洞察力だけじゃなく、直感力にも長けているみたいだけど・・・

浮気がバレるのは、女の勘つてヤツでしょうしね」

see you NEXT

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2085a/>

---

流れる雲とともに

2010年10月28日00時42分発行